

けて考え、自分なりに満足のいく論文を、いつかは完成したいものと、今になっても心の隅に思い続けているのである。

△万葉集における自然観△

第一回卒業 嶋田 千枝子

北風がスモッグを払い、青空が東京の街に返って来たそんなある日、思いがけない理由で卒業論文を手にする事になりました。本箱の中から包装紙に包まれた卒論を取り出して、少々照れながら読み出す内に、四年前の十二月も半ばを過ぎてメ切りの日が迫り、連日徹夜をしていた頃が懐しく思いおこされてくるのでした。

私は橋本達雄先生のゼミを受講して、万葉集の自然観を卒論に選ぶことにしました。本来は万葉の精神、倫理という観点から歌を扱って見たかったのですが、上代の日本人がいかなる精神で、いかなる生活を、何を生甲斐にして何を考えていたのか、そんな点に興味を覚えていたからでした。しかし、それだけの問題を扱うことは国文科として、又自分の能力において不可能なことはわかりきっていたので、その一断片である万葉の自然観に焦点を絞ったわけです。たとい僅かでも万葉の精神に触れることができたらと思い、「叙景歌の変遷を通して」という副題をつけてやっと方針が決まりました。結果としては自然観そのものより、叙景歌の変遷ということに終始して、つい自然観の方が疎かとなってしまいました。何とか自分なりに僅かではありましたが万葉人の心境に触れることができたような気がしました。そして、最終的には「自然へのおもいや

り」こそが日本人の自然観ではないだろうかと結論づけました。

ともあれ、卒論をまがりなりにも書けたということは、私にとつて生涯の思い出となったと共に、もし卒論がなかったら学生と言えような勉強をはたしてしたであろうかと今になって思う次第です。「卒論を書く」という気構えで講義を聴き、本を読み、やがて調べてみたいところや興味をおぼえたところが出て、それを卒論のテーマとして資料集めを始めました。暑い中を朝から国会図書館で並んだり、神田の古本屋街を一軒一軒捜し歩いたり、又夏休みは万葉の故里を旅したり、あらゆることが血となり肉となって自分の書くべきことが自然とわかってきました。資料としては当然第一に万葉の歌で、カードを使用し分類して「神と自然」との関係は夏休みが終るまでに書き上げて、それから本論に入ることができました。それでも軌道に乗って卒論と言えるものになるまでにはかなりのあせりと不安がありました。

そうこうしている内にメ切りの日がやってきました。朝方になってやっと書き上がった卒論を胸に抱き友と大学へ向いました。事務局へ提出したらさぞすっきりするだろうと思いきや、いざ出してしまふと何の感動もなかったのです。しかし、これで今日から自由とばかり、先ず飢えと寒さと睡眠不足をなんとかしようと、友と乾杯しました。レストランで温い食事と果実酒、そして熱狂的なフラメンコにすっかりいい気持になって、ついうとうとしてしまった程でした。卒論をやっと書き終えたという実感を心身共に感じたのでしようか。やはりこの日の事は忘れられませんが。

卒論の思い出というより経験談みたいになってしまいました。それぞれが懐しくつい余計なことまで書いてしまいました。